

令和6年度病害虫発生予察注意報第11号

令和6年11月1日
愛知県

作物名：トマト

病害虫名：トマト黄化葉巻病

病原ウイルス：Tomato yellow leaf curl virus (TYLCV)

媒介虫：タバココナジラミ

1 発生地域 県内全域

2 発生程度 多い

3 注意報発表の根拠

(1) 10月下旬に県内13ほ場で行った巡回調査において、トマト黄化葉巻病の発病株率が2.15%（平年1.15%、前年0.50%）と、過去10年で最も高かった。

(2) 同調査において、コナジラミ類の成虫寄生枝率が13.92%（平年6.09%、前年6.43%）で過去10年で2番目に高かった。発生ほ場率は近年高い状況が続いており、本年は100.0%（平年42.0%、前年50.0%）と過去10年で最も高かった。

4 防除上注意すべき事項

(1) 発病株は見つけ次第抜き取り、適切に処分する。

(2) 本病を媒介するタバココナジラミを以下のとおり防除する。

ア 施設内への侵入を防ぐため、開口部に防虫ネット（目合い0.4mm以下）を展開する。やぶれがある場合は必ず補修する。

イ 黄色粘着板や黄色粘着テープを施設内や周辺部に設置し、成虫を捕殺する。

ウ 多発すると防除が困難となるため、発生初期に表を参考に防除する。気門封鎖剤を活用するとともに、薬剤抵抗性の発達を防ぐためIRACコードが同じ薬剤を連続して使用することは避ける。

エ 農薬散布する場合は、花粉交配用昆虫への影響日数に注意して薬剤選定する。

オ 耐病性品種もトマト黄化葉巻ウイルスに感染するため、感受性品種と同様にタバココナジラミの防除を行う。

カ コナジラミ類によりトマト黄化病（ToCV）も媒介されるため注意する。



図1 タバココナジラミ（左：幼虫、右：成虫）



図2 トマト黄化葉巻病の発病株

表 トマト、ミニトマトにおけるコナジラミ類の主な防除薬剤

作物名	農薬名	使用時期	本剤の使用回数	IRACコード
トマト	ベストガード水溶剤	収穫前日まで	3回以内	4A
	モスピラン顆粒水溶剤	収穫前日まで	3回以内	4A
	アグリメック	収穫前日まで	3回以内	6
	アニキ乳剤	収穫前日まで	3回以内	6
	コルト顆粒水和剤	収穫前日まで	3回以内	9B
	アプロードエースフロアブル	収穫前日まで	3回以内	21A, 16
	ベネビアOD ^{※1}	収穫前日まで	3回以内	28
	トランスフォームフロアブル	収穫前日まで	2回以内	4C
	ディアナSC	収穫前日まで	2回以内	5
	グレーシア乳剤	収穫前日まで	2回以内	30
	サフオイル乳剤	収穫前日まで	—	— (気門封鎖) ^{※2}
	サンクリスタル乳剤	収穫前日まで	—	— (気門封鎖) ^{※2}
	ベミデタッチ ^{※3}	収穫前日まで	—	— (成虫忌避)
ミニトマト	ベストガード水溶剤	収穫前日まで	3回以内	4A
	モスピラン顆粒水溶剤	収穫前日まで	3回以内	4A
	アニキ乳剤	収穫前日まで	3回以内	6
	コルト顆粒水和剤	収穫前日まで	3回以内	9B
	ベネビアOD ^{※1}	収穫前日まで	3回以内	28
	トランスフォームフロアブル	収穫前日まで	2回以内	4C
	ディアナSC	収穫前日まで	2回以内	5
	グレーシア乳剤	収穫前日まで	2回以内	30
	サフオイル乳剤	収穫前日まで	—	— (気門封鎖) ^{※2}
	サンクリスタル乳剤	収穫前日まで	—	— (気門封鎖) ^{※2}
	ベミデタッチ ^{※3}	収穫前日まで	—	— (成虫忌避)
野菜類	フーモン	収穫前日まで	—	— (気門封鎖) ^{※2}

花粉交配用昆虫に影響がある剤が含まれるので注意する。成分ごとの総使用回数に注意する。

※1 シアントラニリプロールを含む農薬の総使用回数は、4回以内(定植時までの処理及び定植直後の株元灌注は合計1回以内、定植後の散布は3回以内)。

※2 気門封鎖剤は、散布液がコナジラミ類に直接かかると効果がないため、丁寧に散布する。

※3 ベミデタッチは、殺虫効果はなく成虫に対する忌避効果が主体であるため、7日間隔で複数回散布する必要がある。

IRACコードは殺虫剤の作用機構による分類を示します。

IRACコードの詳細は、https://www.jcpa.or.jp/assets/file/lab0/mechanism/mechanism_irac03.pdfを参照。

農薬の散布に当たっては、ラベルの表示事項を守るとともに、他の作物や周辺環境への飛散防止に努める。

5 連絡先

愛知県農業総合試験場環境基盤研究部病害虫防除室

電話 0561-41-9513